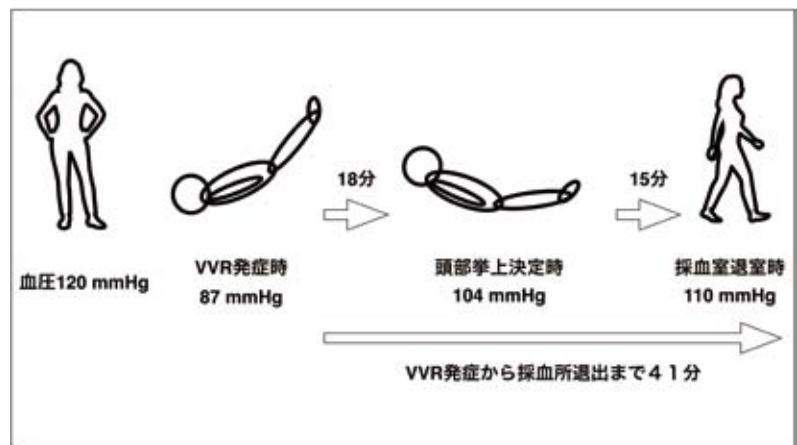


献血時の副作用 血管迷走神経反応 1,000人に6人

血管迷走神経反応(vaso-vagal reaction, 以下VVR)は、採血に伴う副作用全体の4分の3を占め、気分不良、顔面蒼白、あくび、冷感、悪心、嘔吐、めまい等の比較的軽い症状を示すものから、意識消失、痙攣、失禁などの重篤な症状を呈するものまでである。献血での出現頻度は0.6%と少ないので、献血での健診に従事する医師のVVR経験数は多くはないであろう。VVR発症者連続100人の検討によると、発症すると平均30mmHgの血圧低下が起きて気分不良となるが、下肢挙上するだけで平均18分後には半坐位が可能となり、発症41分後に多くは独歩帰宅が可能となる(血液事業44(1):49-53,2021)。その回復の速さには驚かされるが、20%は1時間以上の回復時間を必要としていた。

多くは経過観察だけで回復するが、時に2時間半もの長時間を要する場合がある。回復に1時間以上かかる頻度は献血者1,000人に1人程度と推察されるから、多くの健診医師はVVRからの回復に長時間を要する献血者の経験が極めて少ないであろう。VVRからの回復に1時間以上を要した50人を1



血液事業 44(1):49-53,2021より

時間未満で回復した人80人と比較すると、特に半坐位にしてからの経過観察時間が長引いており、また半坐位にしてから再び気分不良が増強した場合も回復に長時間を要していた。更に痙攣、嘔吐、腹痛を伴う場合も長時間を要していた(日本輸血細胞治療学会誌 68(3):408-411,2022)。

健診医師はVVRを発症した献血者の早期の回復と安全な帰宅を目標に治療にあたる。主たる治療である点滴を行うと確実に献血者の献血会場滞在時間は延長する。それ故健診医師は、点滴が早期回復に有用か否か、悩むのである。VVRからの回復が長引きそうな症状、症候を多数例の検討で特定できれば、発症早期から点滴等の積極的な治療介入につながるであろう。今後の研究に期待する。

(山口県赤十字血液センター 所長 横畑和紀)

G7広島サミットに向けて行った供給体制の取組みについて

G7広島サミットが2023年5月19日から21日の3日間で開催された。今回は1993年東京サミット以来、30年ぶりの都市部開催であり、広島県赤十字血液センターは開催会場や訪問予定の平和記念公園に近く、大規模交通規制区域の中心部に位置していたため、多大な影響が危惧された。今回、サミット期間中の当センター供給部門の取組みについて紹介する。

サミット前の取組みとしては、①過去のサミット開催事例を参考に血液製剤必要確保数を予測し中四国ブロック血液センターへ血液製剤の確保を依頼した。②広島県警からの大規模交通規制の情報を基に県内医療機関へサミット期間中は配送時間の指定が困難なことを伝えて事前に理解を得たうえで、できる限り血液製剤の事前予約と前日納品、院内のストックを増やしていただくなどの説明と協力依頼を複数回行った。③人員確保として緊急時の職員呼出体制と他課への支援体制を構築した。④サミット直前に決定した自衛隊屋外診療所に対して血液製剤の確保及び納品を迅速に対応した。

サミット期間中の取組みとしては、①東西2方面のサミット対応指定施設に緊急持出血液の臨時運用を実施した。②日々リアルタイムに変わる交通規制への対応として、広島県警のホームページと配送員からの情報を収集して交通規制を回避した配送ルートを示し納品時間の遅延回避に努めた。

結果としては、サミット期間中は医療機関の協力もあり、交通規制が実施された5月18日から22日の5日間で緊急走行1件、持出血液からの納品3件(RBC18本、FFP7本)であり、血液製剤の供給件数は平時より少ない結果となった。また、医療機関の診療に支障をきたすような納品遅延もなかった。

今回のサミットでは具体的な情報や指示が得られない中で、当センターでは積極的に入手した情報をもとに医療機関への協力依頼及び配送体制の整備などの対策を講じた。サミット期間中、供給業務を円滑に遂行できたのは、医療機関の協力が得られたことが大きかったと考えられる。今後も医療機関との連携を強化、維持しながら円滑な供給体制の構築に努めていきたい。

また、今回のサミットは無事に閉幕したが、サミット前に警察庁の指示で全国から約24,000人の警察関係者が広島入りをして厳密な警備体制の整備や公共交通機関の交通規制などサミットに向けた事前準備は、行政や関係当局の多数の人が不測の事態に備えて何度も協議と協力要請を繰り返してサミット当日を迎えていることも学んだ。

これは、災害時などの不測の事態の対応にも応用できるものであり、この貴重な経験を今後につなげていきたいと考える。

